



タンチョウ保護研究グループの社会的責任

理事長 百瀬 邦和

巻頭言	・・・1
日韓国際環境賞を受賞	・・・2
国際ネイチャー スクールへの参加	・・・2
再び中国のINSへ!!	・・・3
モンゴルでの マナヅル会議	・・・5
中国東北林業大学の ウーチンミン博士をお迎えしました	・・・6
8月下旬の台風による タンチョウ等の影響について	・・・7
<活動記録>	・・・8
<トピックス>	・・・8
・IRCNからの情報	

今、世界でツル類の生息数が増えているのはヨーロッパ(クロヅル)と北アメリカ(カナダヅル)、そして日本(タンチョウ、ナベヅル、マナヅル)です。一方で、世界で最も多くの種類が生息しているユーラシア大陸東部におけるツル類の生息状況は、総じて好ましいものではありません。各地で、数が減少したり、生息地が破壊されたりと様々な問題が起きているのですが、その中で唯一ツルの数が増えている日本の様子は、韓国や中国の人たちには身近なツル保護の目標に見えるかもしれません。ツルそのものに馴染みの少ない多くの日本人たちも同じでしょう。

しかし、地元では数が増えてきたことによって、ツルと隣り合って生活している農家の人たちが迷惑を受けるケースが多くなっています。そしてツル自身も怪我などの直接的リスクに加えて、人環境に頼っているからこそ、離農、牧場の集約化、営農システムの変更などといった、ツルの保護活動とは全く別次元の人間側の都合によって餌環境を失うというリスクを抱えています。このような日本で起きている様々なツルに関わる情報は、今、私たちが発信していかなければいけない大事なことではないでしょうか。さらに進んで、将来に向けた方向性を提案していくことも必要でしょう。

私たちが法人の定款の中で謳っている「人とツルが共存する豊かな社会の実現に寄与する」という目的のために、社会に向けたいっそうの働きかけが大切になってきていると感じています。

日韓国際環境賞を受賞

百瀬 邦和

タンチョウ保護研究グループは今年10月、第22回日韓国際環境賞 (THE ASIAN ENVIRONMENTAL AWARDS 2016) を受賞しました。同賞は東アジア地域の環境保全に貢献した個人・団体を表彰していて、毎日新聞社と朝鮮日報社が共同で主催、外務省、環境省、在日大韓民国大使館が後援しています。

受賞者は毎年、韓国と日本から各1人(団体)が選ばれることになっていて、韓国の今年の受賞者は忠清南道礼山郡でした。礼山郡は、韓国で絶滅したコウノトリの保護増殖と野外への放鳥事業の展開が評価されました。

タンチョウ保護研究グループへの審査委員長の審査評によれば、「時代背景や時を経るうちに出てくる問題点に、的確に対応しながら活動を発展させてきた」、「生物多様性を保全する典型的な活動を実践した」、などの高い評価をいただき、満場一致で受賞が決まったとのこと。会員を中心としたボランティアの方々によって支えられている冬のカウント調査や標識調査など、タンチョウ保護のための基礎的な調査活動が認められたことは、受賞者である当法人ばかりでなく、タンチョウ保護のために韓国や中国などで連携して活動している仲間たちに向けても嬉しいことです。

10月27日にソウル市中心部のプレスセンター国際会議場で行なわれた授賞式は、主催者である両新聞社の代表に加えて日本の長嶺駐韓国大使も出席され、格式のあるものでした。こちらからお呼びした

韓国のリー・キサップ博士(ソウル動物園長)、リー・ウーシン博士(ソウル大学教授)、パーク・ヒーチョン博士(大邱大学名誉教授・鳥類生態環境研究所所長)もご参加くださいました。

受賞に至るまではとても長い道のりでしたが、会員でもある毎日新聞根室支局の本間さんには大いに助けていただきました。しかし、今回の受賞は本間さんを始めとした多くの会員やタンチョウ保護研究グループの応援団の方々みんなの活動がいただいたものであることは間違いありません。いただいたお祝いの中には「ほんとうに誇らしいですね。でも、これがゴールではないという点がしんどいですね。これからもがんばれよ! という賞なんですね。」というお言葉もありました。

みなさん、一緒に頑張りましょう。



授賞式での百瀬理事長

国際ネイチャースクールへの参加

金森 勇樹

8月25日から9月4日まで中国を訪れ、国際ネイチャースクールに参加しました。今年の国際ネイチャースクールの開催地はカーチン自然保護区(内モンゴル)とファンジドン湿原(遼寧省)でした。また、カーチン自然保護区では中学生、ファンジドン湿原では小学生に授業を行いました。

ネイチャースクールでは、午前中は「湿地」、「植物」、

「鳥」の三つのグループ、午後は美術の時間で「お絵かき」、「工作」、「観察ノート」のグループに分かれて授業をしました。私はカーチンでは「植物」、ファンジドンでは「鳥」のグループスタッフとして子供たちに授業を行いました。

「植物」のグループでは、保護区内に生えている植物の特徴について説明しました。また、説明している間、

子供たちがわかりやすいように、その特徴を紙に箇条書きにして見せたり、実物を触らせて、その特徴を実感できるようにしました。次に、植物とその特徴の確認をするネイチャーゲームや、砂嵐と植物との関係性を示したネイチャーゲームをしました。

「鳥」のグループでは、「渡り」をテーマにして、渡ることはむずかしいということをネイチャーゲームから学びました。また、双眼鏡の使い方を教え、実際に鳥を見てみたりしました。



小学生に
鳥の観察を指導

しかし、ファンジドンでの授業は天気にも恵まれず室内からの観察となり、鳥が見えないということもありましたが、車などの別のものを見て双眼鏡を体験してもらったり、図鑑で特徴を見せてあげたりするなどして、対応していました。午後の授業ですが、私はカーチンでは三つのグループを手伝い、ファンジドンでは主に「工作」グループを手伝いました。「工作」は木片に絵をかいたり、粘土に葉の型を取ったりしました。

ファンジドンではこの二つに加えて、折鶴も作りました。「観察ノート」とは、植物を観察し、それを絵にする授業で、どのように観察したらいいかということ伝える授業です。「お絵かき」は、その日、学んだことを5~6人で一つの絵にしてまとめる授業です。子供たちは、生物がたくさんいる風景を描いたり、鶴を描いたりと思い思いに絵を描いていました。中国語を少し学んだことはありますが、中国語で会話することはまだまだ

できませんでした。しかし、子供たちは授業中、まじめに話を聞いたり、笑顔でネイチャーゲームをしていたりしていましたので、楽しく学ぶことができたと思います。中国の学生たちは下見やミーティングも熱意をもってやっていて、意見がたくさん出てきました。



学生たちによる
夜のミーティング

授業をするたびに改良されていったと思います。また、今回は一つの授業が50分間で、授業の間の時間が10分ほどしかなく、ハードなスケジュールでしたが、時間通りに授業をすることができていました。事前のミーティングがしっかりしている証拠だと思います。そこに学生たちの意識の高さ、国際ネイチャースクールへの熱意などを感じました。さらに中国語ができない私たちにもしっかりと対応し、どんなことを話し合っているのか翻訳してくれたり、子供たちと話すときの通訳にもなってくれたりしました。感謝すると同時に、様々なことに対応することができて、素晴らしい学生たちだと思いました。私も日本で少し環境教育をしたことがありますが、なかなかうまくまとめることはできませんでした。

このような活動は子供たちが自然に目を向け、自然について考えるきっかけにつながり、広まっていけば、中国の環境への意識も高まってくると思います。

最後にこのような素晴らしい機会を下さり、サポートしてくださったすべての方々に感謝したいと思います。

ありがとうございました。

再び中国のINSへ！！

高田 令子

中国で毎年開催されているINS(国際ネイチャースクール)。昨年に引き続き今年も参加する機会をいただきました。今年の開催地は、内モンゴル自治区の科爾沁(カーチン)自然保護区と遼寧省の獐子洞(ホアンジドン)自然保護区の2か所。東北林業大学

の学生が中心の総勢約30人のボランティアメンバーと8月26日から9日間、行動を共にしました。学生メンバーの半数以上は昨年と同じ顔触れ。懐かしい友との再会は感激でした。INSでの活動内容は、昨年の報告でも書きましたので、今回は二度目の参

加で感じたことを書こうと思います。

昨年は、率先して私の通訳をしてくれた学生は僅かでした。私から英語で話しかけると友達の後ろに隠れてしまうほどシャイな子もいましたが、今年の学生たちは皆、英語で積極的に話しかけてくれました。多くの学生が通訳をしてくれました。よりスムーズに、より楽しくコミュニケーションが取れたことは、お互いに有意義だったと思います。

昨年も開催した獺子洞は小さな田舎町にあります。子供たちが外国人と接する機会とはほとんどないでしょう。子供たちの多くは外国人との交流に明らかに戸惑っていました。こちらから話しかけても、恥ずかしがってうつむいてしまうばかり。授業の最後に手を振り返してもらったのがやっとでしたが、今年は、私の事を覚えていてくれた子もいたようで、「こんにちは」「ありがとう」を日本語で話してくれた子がいました。



小学生が描いた
獺子洞(ホアンジ
ドン)湿原の未来

私も授業の所々で挨拶や解説を担当することがあります。その際には、英語ではなくあえて日本語で話します(通訳をしてくれる学生には事前に英語のメモを渡します)。子供たちは戸惑いではなく、日本語への興味を持った表情で耳を傾けてくれました。

科爾沁では中学生に授業を行いました。日本と同じく、



科爾沁(カーチン)
の中学生

中学から英語の授業が始まるとのこと。私が話す簡単な英語は通じていたようで、通訳を挟まなくても意思の疎通が出来ることを、お互いに楽しめたように感じます。科爾沁はモンゴル族が多く暮らす町です。日本で活躍するモンゴル出身の大相撲力士が多いこともあって、日本への興味は強いように感じました。日本語で挨拶してくれたり、「親戚に日本人の伯母がいるよ!」と教えてくれたり。サインを求めてくる際には、漢字ではなく平仮名で書いてほしいとリクエストされました。

INSは中国の湿地に暮らすツル類などの渡り鳥を保護する目的を持って活動しています。子供に環境保護の意識を持たせるのは難しいことですが、大切なことです。渡り鳥の保護となると、繁殖地や中継地、冬地など近隣国との関りも重要です。自国以外の文化、環境、言語を知ることも必要です。ネイチャー・スクールに外国人が関わることで、外国への興味とコミュニケーション力を養う機会が生まれます。中国の子供たちを対象に開催されるネイチャー・スクールに「国際」と名が付く意義を、今年により実感できたように思います。



「湿地」がテーマ
の授業風景

再び参加する機会をいただけたことに感謝するとともに、中国でのこの活動が、これからも長く続くことを願います。

モンゴルでのマナヅル会議

百瀬 邦和

8月12日より16日にかけて、モンゴルで開かれたツルの国際会議に参加してきました。この会議は「東

アジアにおける湿原の生物多様性保護のために:旗艦種としてマナヅルを用いて」と銘打っていましたが、

内容はマナヅル保護のための情報交換と今後の取り組みについて、というものでした。私は国際ナビヅルマナヅルネットワーク代表という立場で招聘されました。

会議はモンゴル自然環境・観光省と、ICF、IUCN/WIのツル専門家グループなど5つの外国や国際機関が協力して開催されました。参加は中国、北朝鮮、日本、モンゴル、韓国、ロシア、アメリカの7カ国からで、この他に国連の機関であるNEASPEC、ドイツの北朝鮮問題担当の財団およびマックスプランク研究所からの参加もあり、参加メンバーは50名程でした。

初日はウランバートル市内の「淡水資源・自然保護センター」といういかにもモンゴルらしい名前の会議場での発表中心の会議、そして後半は車4台に分乗して丸一日かけて移動し、ツル類やノガンの生息地であるフィールドステーションのテントの中での話し合い中心の会議でした。



テントの中での会議風景

ウランバートルでは、室内に入ってしまうと何の変哲もない都市の会議場でしたが、テントの会議場はまさにモンゴルの大自然の中でした。



フィールドステーションの宿泊用テント群

時にはマナヅルやアネハヅルの声が聞こえ、自由に放牧されている牛や羊の群がすぐ近くを通り過ぎたり、また急なスコールや冷たい風にあって慌てて上着を着込んだり、と野味満点でした。

会議の内容は、マナヅルの現状分析と保護活動に向けた方針を検討するものでした。マナヅルに関しては、2年程前からICFが積極的に関わって、国際的な野外調査が行われています。モンゴルは活動の中心地で、ニャンバさんが若手の調査チームを率いています。マナヅルは繁殖地域の多くがタンチョウと重なっていますが、北海道にいない分なのか、分布が西に広がっています。会議のレポートによれば、マナヅルの半数近くがモンゴルで繁殖していると考えられるとのことでした。

タンチョウと同様に、マナヅルの場合でも個体数は越冬地で数えるのですが、最大の越冬地である日本の鹿児島県出水水平野と韓国の非武装地帯(DMZ)周辺を合わせた数は6,000～6,500羽程度と推定されています。

ところが、これまで1,000羽以上がカウントされていた中国のポーヤン湖では200羽程しか見つからなかったという報告があり、関係者の間では危機感が広がっていました。

やはりタンチョウの場合と同様に、繁殖地から中国大陸を南下して越冬するグループと、大きく東寄りに移動して朝鮮半島から九州に渡るグループの関係については、判っていません。そこで近年、比較的利用し易くなったGPS内蔵型の発信器を使った調査が、精力的に行われています。タンチョウに発信器を装着するのは捕獲する作業が難しいのですが、今回の会議のエキスカージョンで見学できたヒナの捕獲作業は、あっけない程に簡単なものでした。モンゴルの大草原は乾燥しているため、草の成長が良くありません。さらに主要産業である牧畜は原則放し飼いですから、日常的に牛や馬、さらには羊の大群に食べ続けられています。したがって、ほとんどの場所がそうなのですが、川や沼の岸から少し離れた乾燥した草原に出てきている家族を見つければ、オートバイで間近まで接近して捕まえるのは容易です。実際エキスカージョンでも、文字通り朝食前の3時間程の間に、アネハヅル1家族とマナヅル1家族を見つけてヒナに足環を付けるまでを見学できました。



朝霧の中でアネハヅルのヒナのバンディング



マナヅルのヒナへカラーリングの装着



カラーリングを付けて放鳥されたマナヅルのヒナ

換羽中で飛べない成鳥を発見できれば、同様にオートバイや車、あるいは馬を使って捕獲するのも、比較的簡単だろうと想像しました。

今回の会議には、北朝鮮からも4名が参加していました。国立研究所に所属している方は、日本の鳥関係者では良く知られているパク・ウー・イルさんの教え子だということでしたので、親しみが持てました。北朝鮮に関しては(その他の多くの事柄と同様に)ツル類に関してもなかなか情報が入手できないので困っていたのですが、モンゴル人であるニャンバさんとは調査協力が始まっているので、彼を通してなら必要な情報が入手できるだろうということでした。ニャンバさんは、今年中に共同調査のために北朝鮮に出かけるとのことです。

私にとってもうひとつの嬉しいニュースは、一時繁殖が確認されなくなっていたタンチョウの1つがいが、再びモンゴル国内で繁殖を始めたということです。このつがいの他に、非繁殖の個体も確認されているようなので、もう1つがいの繁殖が期待できるのかもしれませんが。とにかく、タンチョウの最も西の繁殖地が復活することになります。大陸内陸部の水環境は、地球規模の気候変動によって大きく影響をうけていますが、ツルのためには今後良くなってほしいと願わずにはいられません。15年前の同時期に訪れた時にはカラカラだったウランバートル市内の川に、今回は豊かな水が流れているのを見て、モンゴルにタンチョウ復活のニュースが実感できるものとなりました。

中国東北林業大学のウーチンミン博士をお迎えしました 百瀬 ゆりあ

中国東北林業大学のウーチンミン博士が8月2日から9月2日まで釧路に滞在しました。目的は二つあり、その一つは中国における国際ネイチャースクール(INS)の活動に反映させるべく、環境教育の啓発のための施

設を視察することで、イオンからの助成を受けています。もう一つは、タンチョウの繁殖状況に関する当法人との共同研究にむけての話し合いです。

あいにく、記録的な台風の襲来を次々に受けました

が、その間を縫うように、道東一円の自然環境教育施設を視察し、また、当会会員をはじめ、様々な方との交流の機会も持てました。野外視察では、中国とは異なる環境に生息する北海道の野生のタンチョウを数多く観察でき、また、台風による増水で一面湖のようになった釧路湿原をカヌーでくぐることもできました。

共同研究にむけての話し合いでは、RCC側は理事の正富欣之さんを中心としてプロジェクトを進めることになりました。巣間距離に関する研究を行うことを考えており、解析方法等を検討していく予定です。

ウー博士は再来日も検討中ですが、これを機に、さらに一層、中国との協力関係が深められればと、楽しみにしています。



ウーチンミン博士（RCC事務所にて）

8月下旬の台風によるタンチョウ等の影響について 西岡 秀観

毎年8月下旬の夏休みに道東一円を車で巡回調査を行っています。今年は8月21日～25日まで十勝エリアを車で巡回調査しましたが、台風等の影響により当初予定していた十勝西部（新得町、清水町、芽室町）、十勝北部（足寄町、本別町）の巡回を中止し、十勝中心部～南部、東部を回りました。やはり河川の増水は想像以上で、河川敷が浸水して河川と一体化しているところが多く確認されました。十勝川や利別川の河川敷は、採草地や牛の放牧地として利用されていて、タンチョウも繁殖エリアや採餌場として利用しています。今回の巡回では、タンチョウも増水を避

難するように堤内（堤防の河川の反対側）の畑や水路で多く見つけられました。子育ても幼鳥が飛翔できるくらいの時期だったので、人間よりは被害が少ないようです。しかし、デントコーン畑や牧草地の生育や収穫に多大な影響があり、今シーズンの酪農業はどうなるでしょうか。夏から異常な気圧配置により長雨や台風6号の後の温帯低気圧、7号、11号、9号、一番被害を出した10号そして12号が立て続けに襲い、道路、鉄道、住宅を押し流し、数名の命も奪われました。今後このような大被害が起きないことを祈念します。



利別川の増水状況（8月22日撮影）



十勝川の増水状況（8月22日撮影）

<活動記録> (2016年 8月～11月)

8月 2日 ウー博士、来釧
8月 4日 ウー博士、釧路市長を表敬訪問(百瀬)
8月 5日 運営会議(7名出席)
8月10日 マナヅル国際会議に出席
～18日 (於:モンゴル 百瀬)
8月24日 中国INSに参加(百瀬、高田令子、金森勇樹)
～9月 4日
9月 2日 ウー博士、離釧
9月 5日 釧路湿原でのタンチョウのバルーン調査を
視察(正富Y、百瀬Y)
9月 9日 運営会議(10名出席)
9月16日 日本鳥学会で発表(於:札幌 正富Y)
～19日
9月28日 釧路湿原自然再生協議会第2回地域づくり
小委員会で発表(井上)
9月28日 根室市で斃死タンチョウの收容(百瀬)
10月 7日 運営会議(7名出席)
10月 8日 別海町で傷病タンチョウの收容(高田令子)
10月19日 中標津町俵橋湿原でニオ作り(RCCより2名、
中標津より8名)
10月19日 釧路湿原自然再生協議会 第19回 旧川復元
小委員会出席(井上)
10月26日 JAL本社訪問(百瀬)

10月27日 日韓国際環境賞(AEA)の授賞式に出席
(百瀬)
11月 2日 釧路市長を訪問し、AEA受賞の報告(百瀬)
11月 4日 運営会議(9名出席)
11月15日 臨時運営会議(9名出席)

<トピックス> IRCNからの情報

国際タンチョウネットワーク(IRCN)の副代表である
E. イリアシェンコ氏から以下の情報が入りました。

歯舞諸島の水晶島で、今年タンチョウ1つがい
が繁殖し、ヒナ1羽が確認されました。

国後島ではタンチョウ3つがいが目撃され、
内1つがい繁殖しましたが、ヒナの情報は不明
のことです。

<会員 (11月 2日現在)>

運営会員:27名、個人サポート会員:136名、団体サポート会員:15団体

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter

TANCHO

Twenty-ninth issue November 2016

<表紙写真>

RCC事務所玄関にある手作りの看板

(2016年11月撮影)

特定非営利活動法人

タンチョウ保護研究グループ

編集: hide.N

〒085-0036

北海道釧路市若竹町9番21号

Tel/Fax 0154-22-1993

e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp

URL: <http://www6.marimo.or.jp/tancho1213>